

元英国外交官チャールズ ル ガイ イ トン (3/6)

:

明:

哲学者/作家による真の探求は、信仰と行を和させるための恒常的な葛藤にまされました。第3部：
体を超越することなき心の中だけの英知と、神の。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 著名人](#)

より: ガイ イ トン

日 08 Oct 2012

集日 08 Oct 2012

私はチャタハウスからケンブリッジへ行きましたが、そこでのカリキュラムはつまらないものだったので、自分にとって重要性のある科目以外の勉強は怠っていました。当時は1939年で、大学入学の直前に争が始まり、二年つとに入っていました。私は常にドイツ兵にされるのではという予感を持っていました。私のから依然としてれない疑を解する答えを探し出すためのは殆どありませんでしたが、そのことは私の足を宗教へ向けたりはしませんでした。大半の友人たちと同じように、私も教会、そして知りもしない神にしてリップサービスする者たちを蔑していましたが、こうした心を健化する必要が出てきました。半世以上たった今でも、その光景を明にえています。私は友人たちとのキングスカレッジでの夕食、くまでコヒを飲んでいました。会は宗教に及びました。テブルの先にはその明さ、秀さと洗性で知られる学部生が座っており、会が一途切れたため、また彼を感させる目的で私はこう切り出しました。「今や宗教の神なんて信じるインテリなんていないよ！」

彼はやや悲しそうなをしてこう言いました。「逆だよ。今やインテリしか神を信じていない。」私はテブルの下からこっそり逃げ出したくなりました。

ともあれ、得力にかけて卓越した、40年の明な友が私にはいました。彼は当「英国が生み出した唯一の哲学作家」と形容された、作家のL.H.マイヤズです。彼の著作「The Root and the Flower（根と花）」は、私をませた多くのに答えただけでなく、安らぎと思いやりを事なまでに和させるセンスを持っていました。私にとっては、この世で得ることの出来る最大の宝は安らぎであり、思いやりは最大のであると思えました。この人こそは、るぎない自信を持ち、英知をもって存のについて洞察したのです。彼に手をくと、すぐに返事が来ました。そのの3年、少なくとも月に2度はお互いに手をきました。私は彼にすべてをぶちまけ、彼も自らを真に理解する若き信奉者をようやく付け出したことを信じ、同じ持ちで返事をいたのです。やがて私たちは出会い、睦を深めました。

しかし、物事は思い通りには行きませんでした。彼の手からは内面的な兆候、悲しみ、幻がみ取れるようになりました。彼に、持ち得るすべての安を著作に注ぎんで、自分の分は何も残さなかったのかとねると、彼はこう答えました。「君のい推はおそらく事だ。」彼は全人生を享と「（彼曰く、崇高なものと下劣なものの双方）」の追求にやしました。彼の富、魅力、容貌のコンビネーションに抵抗出来る女性は上流を含めかで、彼自身も彼女らの惑に耐える理由はありませんでした。性神秘主に没した彼は、宗教をき、いかなる系的な理にもいませんでした。ただ、彼は老化の事を直することが出来ませんでした。彼はわろうと努力し、去から悔悟しようとするみましたが、それはすぎました。私たちの文通が始まって3年で、彼は自したのです。

私にとっての彼への着は持し、私は男に彼と同じ名前を付けました。私がマイヤズの死の意味を完全に理解するまで数年を要しましたが、それは彼のどの著よりも多くのことを学ばせました。彼の英知は、彼のの中だけに留まっていたのです。それは彼の人としての体を超越することはなかったのです。ある人は精神世界の本をみ、神秘主義者の教えを研究することに人生をやします。彼は天地の秘密を超越したと感じたかも知れませんが、その知が彼自身の性に具体化し、彼自身を化させなければそれは益なものなのです。私には、理解がなくとも一心に神へと祈り、信仰を持つシンプルな人

の方が、精神科学において最も博学な人よりも があるのではと思えてくるようになりました。

マイヤズはヒンズ教の形而上学的な核心教であるベダント学派に深く影 されてきました。私の母によるラジャヨガへの心から、私もその方向へと流されました。ベダントは私の主な心事となり、最終的にはその道が私をイスラムへといたのです。このことは大半のムスリムたちにとって 的、またはイスラムによる偶像崇 にする妥なき非 について知る人ならば、 もにとって 愕的なことかも知れませんが、私のケスは稀ではないのです。ヒンズ教徒の大がどのような信条を抱いていようとも、ベダントは唯一なる真、つまり 一神 を げ、イスラムがタウヒドと呼ぶものと同じなのです。ムスリムにとっては他の人々よりも、古来から くの他の 宗教には一神 の教 が基 を成していることへの理解が容易いはずで、「 の中の宝石」に偶像崇 的な迷妄が重ねられたのは、 々人の心に偶像崇 が重ねられた 果なのです。 大なキリスト教神秘主 者も「真理は人にとって生得である」と言ったように、タウヒドこそは真理なのです。

ケンブリッジでの生活はあっという に わり、私はサンドハスト王立 士官学校へと送られ、若き士官として五ヶ月 に渡り、 すか されるかの特 を受けました。兵 をさらに学ぶため、スコットランド北部へと派遣され、そこでは私自身の意思に任されており、 をしたり、北海沿いの花 岩の崖の上を散 したりして を ごしました。そこではいつも が吹き荒れていましたが、私はかつて感じたことのないような安 を感じていました。ベダント、そして中国古来の教 である道教について み むほど、私はようやく物事の本 というものについて一定の理解を得、そしてそれ以外はすべて のような い存在である究 の真理というものを（おそらく思考と想像の 物でしょうが）垣 たのです。しかし、私はまだそれを「神」と呼ぶことはおろか、アッラ と呼ぶ など到底出来ていませんでした。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/161>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。